科目区分：芸術文化課程（音楽文化コース）
授業科目名：伴奏法②

「伴奏法②」-管弦楽曲の鑑賞を通した学習-

音楽教育講座・福富 彩子

１．授業の目的と到達目標

本授業は、ピアノの演奏法や表現法を応用発展させ、教育や音楽実践の場において柔軟に対応できるピアノ伴奏能力を養うことを目的とする。さらに、誰かと演奏を共にする喜びを感じることによって、コミュニケーション能力を高めることを目的とする。到達目標は、客観的に相手と自分の音を聴き、「伴奏法①」で習得した表現法を実際の演奏に結びつけるための技術を身につけること。また、合奏の手順や方法を選択し、コミュニケーションを円滑に行えることである。

２．授業の概要について

本授業は、芸術文化課程音楽文化コース３回生の選択科目として開講されている。受講にあたっては、ピアノに関する専門的な知識および演奏技術を習得していることが望ましい。今回の受講生は全員、４年次の卒業研究でピアノを希望選択しており、１年次より「ピアノ①～⑤」を継続して履修している。

１）「伴奏法①」（前期開講）の主な授業内容

① 声楽作品・器楽作品の伴奏の演習。
② ピアノ協奏曲の伴奏パート（オーケストラパート）の鑑賞と演習。
③ 合唱曲、童謡、唱歌等の簡易な伴奏楽曲の初見演奏。

２）「伴奏法②」（後期開講）の主な授業内容

① ８小節～16 小節程度の旋律に対する和音・伴奏付け。
② 合唱曲、童謡、唱歌の伴奏表現に関する講義・演習。
③ ４手連弾・８手連弾による楽曲の初見演奏。
④ 交響曲のピアノ連弾版の初見演奏。

３） 取り上げた主な作品

① 「この道」「おぼろ月夜」「ふるさと」他
② イタリア歌曲集（１）より「Star vicino」「Già il sole dal Gange」「Sento nel core」「Son tutta duolo」「Caro mio ben」他
③ F.ショパン:ピアノ協奏曲第１番 Op.11 ホ短調
④ E.グリーグ：「ペール・ギュント」Op.46 より“朝の気分”（ピアノ連弾版）
⑤ L.v.ベートーヴェン：交響曲第７番 Op.92 イ長調（ウルリヒ編によるピアノ連弾版）

３．授業内容に関する工夫点

１） 管弦楽曲を取り上げた授業内容の展開

ピアノは一人で演奏することがほとんどであり、他者の音を聞きながら演奏する、あるいは他者と一緒に呼吸を合わせて演奏するという経験や機会が少ない。したがって、本授業では、アンサンブルを通して良い耳を育て、音楽を表現することの奥深さを知ってもらうことを目的とした。そのため、通常オーケストラで演奏される協奏曲やアリア等の伴奏パート（ピアノに編曲されたもの）を取り上げ、管弦楽の響きをピアノでどのように表現できるのか、その可能性と具体的な表現方法について研究し、鑑賞と演習を行った。さらに、その応用として、管弦楽曲のピアノ連弾版（４手および８手による）の初見演奏を行った。

２） 到達目標に向けた段階的学習

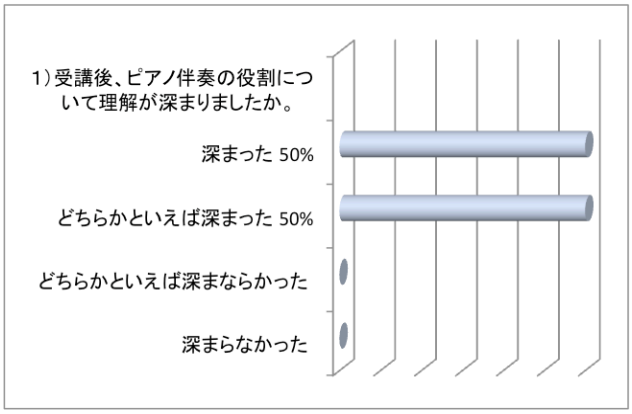
前期開講の「伴奏法①」から継続した学習の中で、段階的に次のような手順で授業をすすめた。他者と共に演奏することに慣れ、アンサンブルを楽しむことができる→簡易な楽曲の初見演奏ができるようになる→簡易な旋律に伴奏付けがで

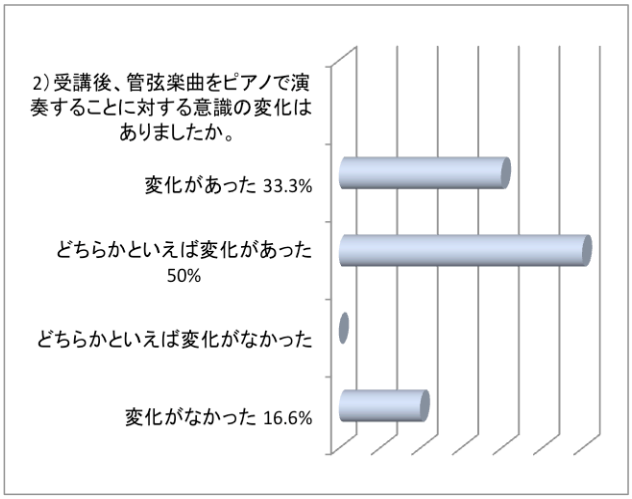
きる→作品の全体像をなるべく早く認識し、演奏することができる→オーケストラ作品（ピアノ連弾版）をアンサンブルで初見演奏することができる→オーケストラの響きをイメージしてピアノ演奏における表現方法を選択することができる。

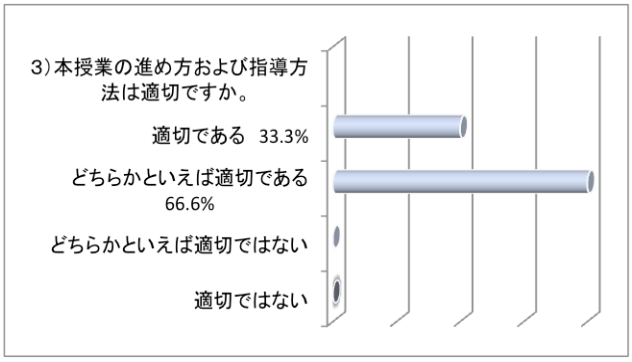
４．アンケート結果

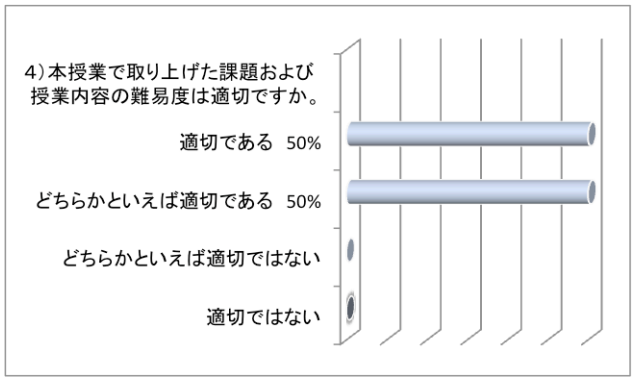
授業終了時、４段階評定と選択式および自由記述による全９項目のアンケートを実施した。

１）４段階評定による集計結果

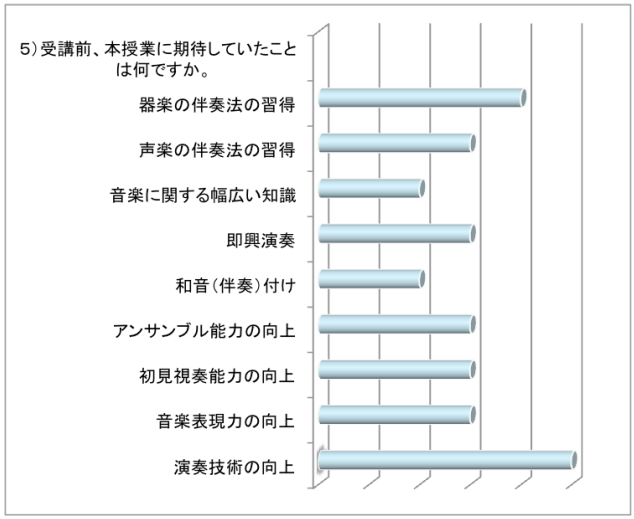


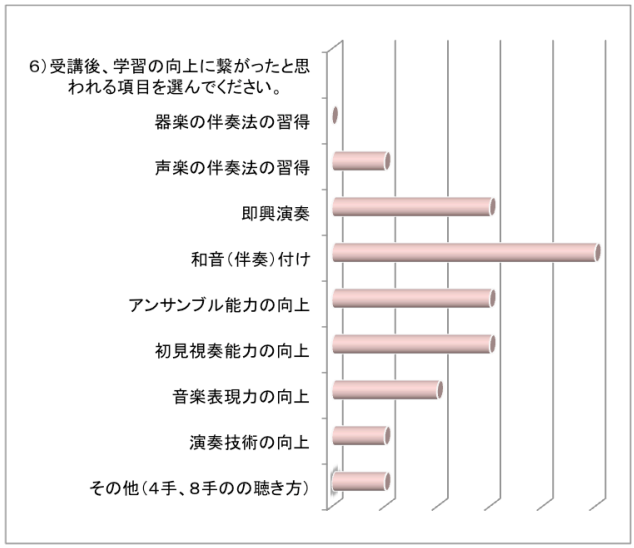






２）選択式による集計結果（複数選択可）





３）自由記述によるアンケート結果

「受講後、管弦楽曲をピアノで演奏することに

対する意識の変化はありましたか」の設問に対して、「変化があった」もしくは「どちらかといえば変化があった」と回答した学生に、どのような変化があったのか具体的に記述してもらった。その結果、次のような意見が挙げられた。「今回初めて連弾による管弦楽曲に取り組んだことでさらに深く考えるきっかけになった」、「管や弦の音などそれぞれの音を使い分ける難しさ、楽しさを感じることができた」、「弦や木管で奏でる、ということを意識した音色について少しわかったような気がする」、「どの楽器がメロディーで、どのような演奏をしているかという点に関心を持つようになった。オーケストラのパートであっても聴こえてほしい音とそうでない音にメリハリをつけるよう意識するようになった」、「どのような音色やタッチで弾けばよいのか具体的に分かった」。

さらに、授業全体に関する意見としては、次のようあった。「わかりやすい授業だった」、「普段聴くだけの曲をピアノで演奏でき、非常に楽しかった」、「伴奏付けは苦手分野だったが、少し克服できた」、「どのパートが大切なのかが分かり、非常に勉強になった」、「もっと声楽伴奏や管弦楽器の伴奏について学べたら良かった」、「オーケストラをピアノで表現する楽しさを感じることができた」、「伴奏付けなども学習でき、そのポイントを教えて頂くなどして今後に約立つと思った」、「管弦楽曲が連弾になっていることを知らなかったので、楽しかった。もっと演奏してみたい」。

５．授業の達成度

受講生全員がほぼ欠席なく、意欲的に課題に取り組んでいた。また、設問６のアンケート結果では、和音（伴奏）付けや即興演奏、初見視奏、アンサンブル能力が向上したと回答した学生が複数あった。上記の項目を選択回答した受講生の共通点として、どの音が大切であるのか、どのパートを聴きながら演奏すれば良いのかという意識化が大切であることを実感しており、そういった認識が、初めて演奏する楽譜の情報を即座に読み取る力に繋がったのではないかと考えられる。

さらに、他の受講生の演奏を聴き、意見交換を行うことで、自らの演奏に対する気づきや表現方法の開拓などに有効に働いたと考えられる。

６．今後の課題

受講前に期待していた項目の選択（設問５）において、「演奏技術の向上」、「器楽の伴奏法の習得」および「声楽の伴奏法の習得」が挙げられたが、受講後の学習の向上には結びついてないと受講生が感じていることが設問６のアンケート結果から浮き彫りになった。学習の向上に繋がったと思われる項目の選択（設問６）において、「器楽の伴奏法の習得」と回答した学生は 0%であった。また、「声楽曲の伴奏法の習得」と選択した受講生も極めて少なく、自由記述欄にも「もっと声楽伴奏や器楽伴奏を学びたい」という意見があった。声楽曲や器楽曲の伴奏を中心に行えない理由として、受講生それぞれが合奏する相手を見つけて授業に一緒に参加してもらうことが困難であり、あらかじめ課題を決定し授業計画をたてることが難しくなるためである。しかしながら、次年度以降、特に声楽曲の伴奏に関しては伴奏法の要となる重要な演習であるため、方法の見直しを行っていくことが必要であると考えている。「演奏技術の向上」という面では、イメージする音色を具体的に表現する能力も演奏技術に含まれるため、その具体的方法を提示できるよう指導法の改善を行っていきたい。

最後に、授業で取り組む作品について、授業中に受講生から「難しい」との声が聞こえた。難易度の高い課題への取り組みは、演奏できた時の達成感や意欲向上が期待できる一方、共演する相手の音を聴く余裕がなく、本来の目的から逸脱してしまう可能性もある。今後、受講生の学習状況に応じた内容を再検討していきたいと考えている。